

2025年7月27日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教46 「罪のうちに死なないために」

イザヤ46：3～4、ヨハネ8：21～30

「あなたたちは罪のうちに死ぬ」わたしたちは、今日この厳しいイエスさまの言葉の前に立たされています。「あなたたち」とは他でもないわたしたちのことです。「罪のうちに死ぬ」その理由は何でしょう。創世記のアダムとエバの物語を思い起こしてください。神さまとの約束を破って木の実を食べたアダムとエバは「主なる神の顔を避けて、園の木の中に隠れた」（創世記3：8）とあります。光よりも闇を好んだ。光を避けて隠れる。闇は存在を消します。そのようにして神さまの御前からわたしたちはいなくなってしまうました。わたしたちは神さまの存在を消し、自分の存在をも消してしまいます。それは神さまに造られた本当の自分ではなくなるということ。神さまから離れた自分、それを聖書では罪と呼びます。

罪は自分以外の他者、隣人の存在を消していきます。アダムとエバ、カインとアベルの話に始まり、人類の歴史は、その罪の闇ゆえに神さまの存在を消し、隣人の存在を消していった歴史とも言えるでしょう。そのように人はますます孤立し、利己的になり相手を理解しようとしないう。それが今の世界の姿であり、わたしたちの生きている現実ではないでしょうか。そしてそのままであれば、あなたたちは罪のうちに死ぬことになると思います。イエスさまはおっしゃるのです。楽園を追放されるアダムとエバに神さまは言われました。「塵にすぎないお前は塵に返る」（創世記3：19）これは死の宣告です。パウロも「罪が支払う報酬は死です」（ローマ6：23）と述べています。罪の先にあるのは死なのです。それは光のない、永遠の闇の中に葬り去られることを意味しています。罪のうちに死ぬ。それは罪ゆえに神さまの裁きのうちに死ぬということです。考えただけでも恐ろしいことではないでしょうか。

ある神学者が、このイエスさまの言葉について、医者が患者にこう警告するのと同じだと言います。もし治療をしなければあなたは確実に死ぬことになる。このまま放っておいたらあなたは死にますよ。これは脅しではなく、治療して助かるのであれば、わたしたちは迷わず治療すればよいということです。イエスさまはわたしたちが罪のうちに死ななくて済む道を開いてくださいました。ではその助かる道とは何でしょうか。24節には次のようにあります。『わたしはある』ということ信じないならば、あなたたちは自分の罪のうちに死ぬことになる（24節）と。これは逆を言えば、イエスさまは「わたしはある」というお方であることを信じるならば、罪のうちに死なないで済むと言っているのです。

「わたしはある」という言葉は、聞き覚えがあるでしょう。すぐに頭に思い浮かぶのは、モーセの召命の箇所です。神さまはモーセに「わたしはある。わたしはあるという者だ」（出エジプト3：14）と自己紹介されます。ここで何より心に留めていただきたいのは、神さまがご自身のことを「わたしはある」と言われた、その同じ言葉をイエスさまが言われたことです。ユダヤ人から「あなたは、いったい、どなたですか」（25節）と尋ねられた。それに対して「わたしはある」（24節、28節）と言われた。それは神さまがモーセに「わたしはある」と自己紹介されたのと同じように、イエスさまもまたこの神さまとして「わたしはある」とおっしゃったということです。つまりイエスさまがどなたなのか。わたしにとってどういう存在なのか。何をしてくださったのか。これが罪のうちに死なないために決定的に重要な信仰なのです。

わたしたちは放っておけば罪のうちに死んでいくだけの存在です。ところが神さまはそれをお許しになられません。どうしてでしょう。神さまがわたしたちをお造りになられたからです。「わたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す」(イザヤ46:4)のです。わたしが造ったのだから最後まで責任を持つ。あなたたちが罪のうちに死んでいくのをどうして黙って見ておられようか。そんなことわたしにはできない。わたしの責任でわたしはあなたを救おうと言われるのです。最近、何でも「総括する」「責任をとる」と言われますが、そういうことは軽々しく言えることではありません。わたしたちは自分の人生を総括することなどできない。それは罪があるからです。罪のわたしがいくら自分で責任をとると言っても説得力はないのです。ただ罪のないお方、まことの神さまだけがこのわたしの人生に対して責任を取ることができます。

では、その責任を神さまはどのように果たされたのでしょうか。「人の子を上げたときに初めて『わたしはある』ということが分かる」(28節)「人の子を上げたとき」これはイエスさまが十字架の上にあげられることを意味しています。本当ならば、わたしたちが罪のうちに死ななければならぬ、十字架に上げられなければならないのを、神さまの裁きを一身に引き受けてイエスさまが代わって十字架の上にあげられた。ゲツセマネの祈りでイエスさまは「ひどく恐れてもだえ始め」(マルコ14:33)と記されています。ルターは、イエスさまほど死を恐れた方はいないと言いました。それは十字架の死が神さまに呪われ捨てられることだからです。けれどもそのことによって、わたしたちはもう罪のうちに死ななくても済んだのです。

説教の冒頭で、闇は存在を消すと申しました。罪の闇は神さまの存在を消し、隣人の存在を消します。それでも神さまは「わたしはある」といわれ、存在し、どこまでも共にいてくださる。「わたしをお遣わしになった方は、わたしと共にいてくださる。わたしをひとりにはおられない」(29節)それはわたしたちに対する約束でもあります。あなたを捨てない。でもその代わりにイエスさまが十字架でその存在を消すように捨てられました。

「わたしはある」は、原文では「エゴー・エイミ」です。「わたしは～である」と訳される言葉です。「わたしは命のパンである」(6:48)「わたしは世の光である」(8:12)「わたしは良い羊飼いです」(10:11)「わたしは復活であり、命である」(11:25)わたしたちは、これから福音書を読み進めていく中で何度もこの言葉に出会うでしょう。その度に、イエスさまがわたしを罪のうちに死なせないために、命のパンとなり、光となって、羊飼いとなって、ご自身を与え尽くしてくださったことを思い起こしましょう。そして最後は十字架に上げられ、三日目によみがえられて、神さまと共に生きる、隣人と共に生きる新しい命の道を開かれました。だからわたしたちはもはや罪のうちに死ぬことはありません。それどころか、わたしたちにはよみがえりの命が保証されているのです。

天の父よ。罪のうちに死ぬはずのわたしたちを永遠の命の中に、その命の光の中に移して下さる幸いを感謝いたします。そのためにイエスさまが十字架に上げられました。その犠牲によって今のわたしがあることを覚えさせてください。どうかこの恵みに少しでも応えることができるわたしたちとならせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。